

science & medical



隔離分娩室で自然分娩

赤ちゃんを母親に見せる

新型コロナウイルス感染妊婦の自然分娩

赤ちゃん用の個室へ



赤ちゃんは2回の抗原検査で陰性が確認できれば、通常的新生児室に移る

母親にはオンラインなどで赤ちゃんの様子を日々伝える。母子ともに陰性が確認されると対面。母乳も与えられるようになる



りんくう総合医療センター(大阪府泉佐野市)での感染妊婦の出産の流れ

感染症病棟(5階)に入院し、陣痛が来る前にコロナが陰性になることを目指す。コロナ診療と同時に妊婦健診。産婦人科医や助産師がほぼ毎日訪れ、病棟内にある超音波検査の装置などを使って母子の状態を確認

自然分娩(経膈分娩)

おなかを切らず、妊婦の希望に沿えるようにするため、可能な限り選択

帝王切開

コロナ症状の急変や胎児の心拍の異常、双子などの場合

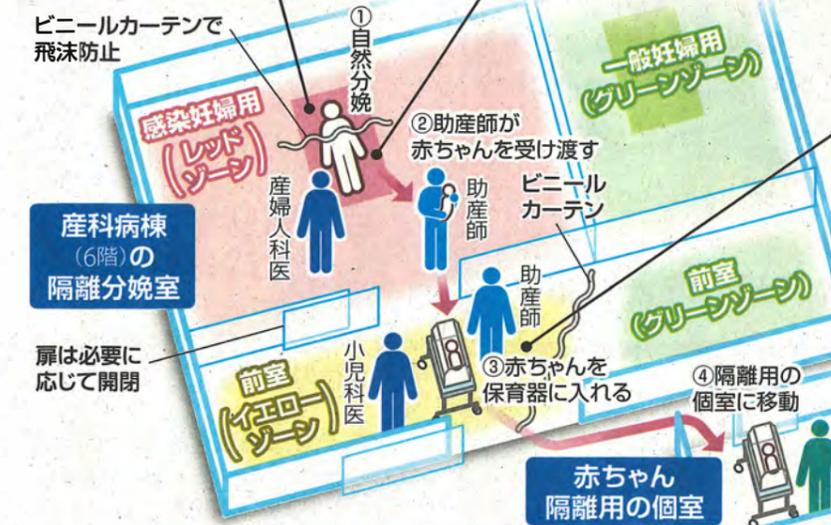
感染妊婦の受け入れ 71人(昨年4月~今年9月)



多くの医療機関は、妊娠36週以降では「帝王切開」を選択している

自然分娩だと
 ・妊婦がいきむどきに呼吸が荒くなるなどして飛沫が広がりやすい
 ・夜間の出産などでは、医療スタッフをすぐにそろえにくい
 ・感染妊婦用の分娩室を設けられない
 などが課題になるが...

帝王切開なら
 ・医療スタッフや他の一般妊婦への感染防止につながる
 ・分娩時間の短縮
 ・計画的に産産できる



2021年	8月31日	9月2日	3~5日	5日午後8時	6~10日	11日	12日午前0時半	午前3時12分	13日	14日	15~25日	26日	
夫の新型コロナウイルス感染が判明	37度台の発熱。検査で長男(当時4歳)とともに感染判明	保健所には体調を伝え、入院先が決まるのを待つ。体温は39度台に	保健所から「入院先が決まった」と連絡があり、りんくう総合医療センターへ救急車で搬送。肺炎がみられ、「中等症」と診断された	せきと息苦しさが日々悪化「苦しくて動けず、トイレにも行けなくなった」	「中等症II」に悪化し、酸素投与を開始。午後10時頃から15分間隔でおなかに張り	おなかの張りが痛みに変わる。助産師の内診で子宮口が開いており、産科病棟の隔離分娩室へ	妊娠37週で出産。産後、感染症病棟に戻ったが、呼吸状態が悪化した。一時的に「高流量酸素療法」(ネーサルハイフロー)を受ける	「分娩中はいきむ力が出ず、「帝王切開して」と頼んだが、産後もせきがひどく、おなかを切らずに良かったと思った」	2回の陰性確認で隔離解除。産科病棟へ	次男と対面	「おなかに置いてもらってほしかった。早く抱っこしたい、授乳したいと、力がわいた」	授乳開始。徐々に次男と同室で過ごし、リハビリと育児指導を受ける	退院

大阪市パート従業員女性Aさん(35)のケース

厚労省は「やむを得ない」
 感染妊婦の出産について、厚生労働省が作成した「診療の手引き」などでは、分娩時間の短縮や感染

対策を目的に、帝王切開の選択は「やむを得ない」などとされている。日本産婦人科学会が9月にまとめた中間報告では、妊娠36週以降に感染が判明した軽症や中等症の妊婦32人のうち、20人が感染を理由に帝王切開で産産していた。

各病院の対応状況ははっきりしないが、大阪府内では、市立豊中病院(豊中市)も感染妊婦の自然分娩に取り組んでいる。国立循環器病研究センター(吹田市)は出産日を決め、陣痛促進剤を使って産産した事例がある。

デザイン 申井徹男

なるほど
科学 & 医療
 医の現場

対策徹底 帝王切開を回避

飛沫など懸念
 妊娠36週以降の妊婦が新型コロナウイルスに感染した場合、多くの医療機関では感染対策などを理由に帝王切開を選んでいる。こうしたなか、りんくう総合医療センター(大阪府泉佐野市)は陣痛を待ち、できるだけ産道を通って自然分娩(経膈分娩)で産めるように取り組んでいる。帝王切開にするのは、自然分娩だと妊婦がいきむどきには負担が大きくなるかに飛沫が広がる懸念があるほか、出産が長時間に及べば、呼吸状態が悪化した妊婦には負担が大きくなるか

らだ。感染妊婦用の分娩室を設けられない施設も多い。帝王切開なら計画的に短時間で産産できる。

一方、同センターは、感染妊婦用と一般妊婦用の分娩室をそれぞれ設け、産科病棟内は感染の危険区域と安全区域に分けるなど対策を徹底。様々な診療科が連携し、多くの感染妊婦で自然分娩を実現している。受け入れた感染妊婦は9

月末までで71人に上る。まずは陣痛が来る前に陰性になることを目指し、感染症病棟でコロナの早期回復に注力する。感染対策で隔離する必要がなくなれば、通常のお産ができ、産後すぐに母子で触れあえる。

感染症病棟には産婦人科医や助産師がほぼ毎日訪れ、母子の状態を確認する。お産が夜間になっても対応できる体制も整える。

コロナ治療中に陣痛や破水が起きた場合でも、コロナ症状が悪化したり、胎児に心拍の異常があったりする場合は陣痛を待たず、自然分娩を選択する。

妊娠36週でコロナに感染した大阪市のパート従業員Aさん(35)は9月5日夜、同センターに入院。抗ウイルス薬を投与された。酸素投与が必要な「中等症II」に悪化した。男の子を自然分娩で無事産産した。「産後おなかに傷があったら、すぐつらかったと思う。自然分娩ができて良かった」と振り返る。

荻田和秀・産婦人科部長は「医療者側は都合で帝王切開を選ぶのは避けたい。可能な限り通常のお産に近い形で産産できるようにしたい」と話す。(東礼奈)